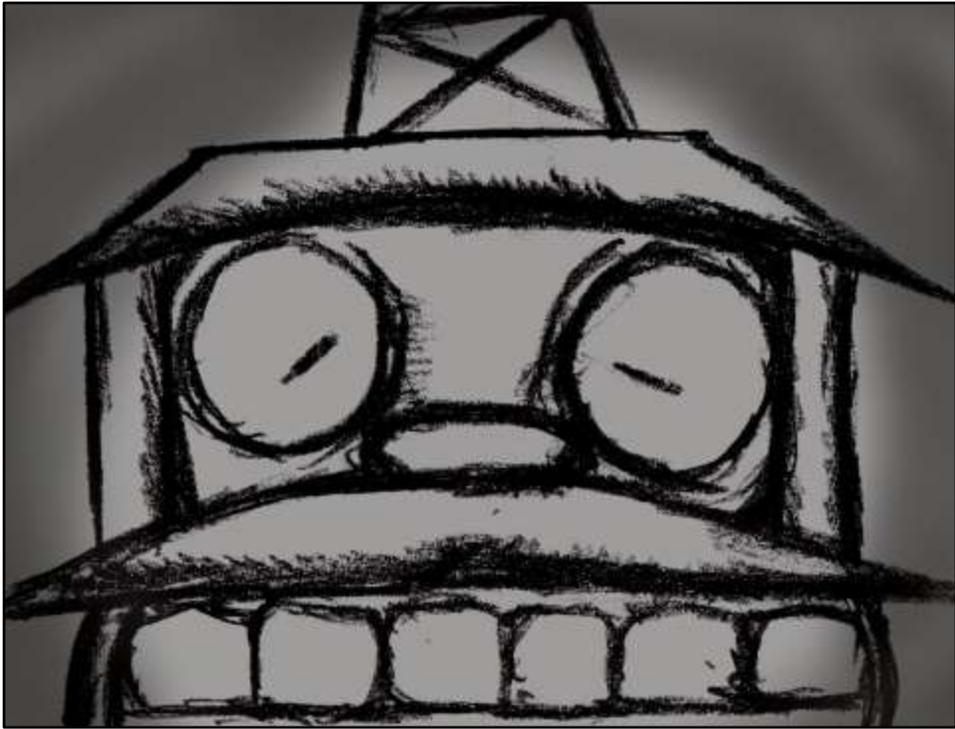




この物語は東日本大震災において復興支援の為、広島県の江田島市から宮城県の気仙沼市に送られたフェリーの実話をもとに制作したフィクションです。



《う～ん、むにやむにや、う～ん。わしか？わしはドリームのうみ、皆からドリームじっ
ちゃんとよばれとるんじゃ。こうみえてもなあ、昔は江田島と広島を結ぶフェリーとし
て多くの人乗せてきたんじゃ。もうずいぶん年を取ってしまつてなあ、今はこのくら
い倉庫の中で過ごす毎日じゃ。もう船として使われることもあるまあて。あとは鉄くず
にして売り出されるのをまつだけかあ》

ガラガラガラ、ドーン

《おや誰か来たんか》



船のドックで解体を待つ、ドリームのうみの前に現れたのが、この船のオーナーとしてドリームと共に引退を決めた夢次郎です。

父「ドリームも、よお頑張ってくれたよのお。ありがとうのお。ワシも定年じゃ、今日は別れを言いにきたで。ワシはのんびりやるけえ、おまえものんびりせえよ」

ドリーム《夢次郎さんかあ、あんたにはお世話になったのお。思えばあんたとの出会い

いは30年前じゃ。あんころは、あんた無茶ばかりしとったのう》
と、その時！！



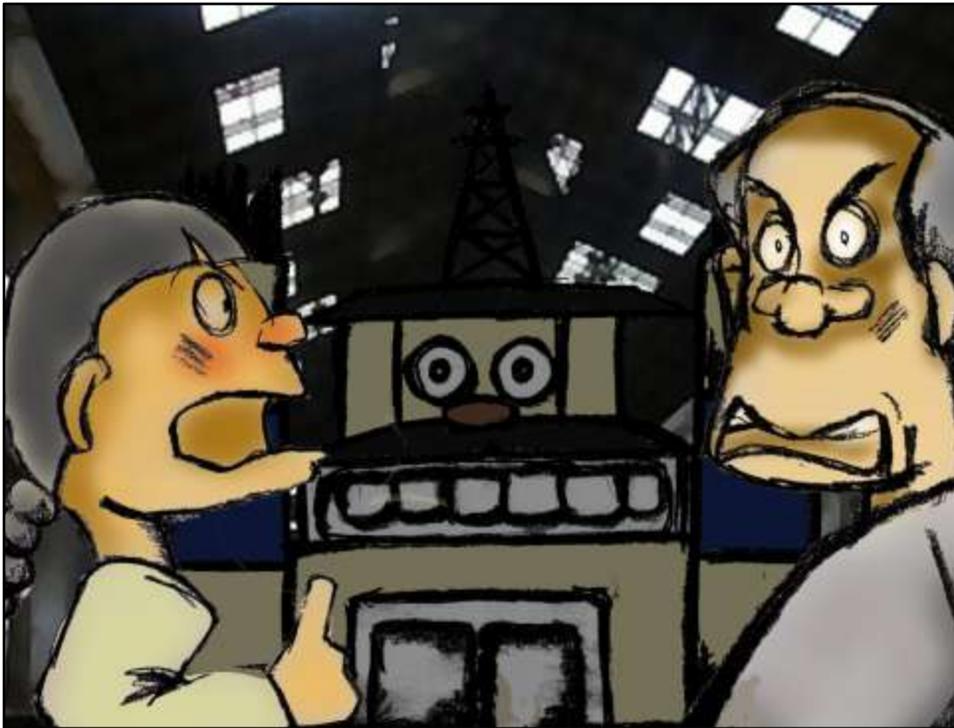
テレビ

「番組の途中ですが、東北地方で大きな地震が発生しましたので、お知らせします。ただいま東北で大きな地震が発生した様子です。

予報センターによるとマグニチュード9。

大きな津波の発生可能性があります。

皆さん至急、高台に避難してください。海岸線に近づかないようにしてください。津波が来ます。至急、高台に避難してください」



里香「父さん！父さん！」

父「どしたんなら、そがあにあわてて」

里香「み、宮城が、大変たいへんなことになってる」

父「だから、どしたんなら」

里香「今、東北で大きな地震があったんと！それで、えーらいおっきな津波が来とるらしいの！東北全体がとんでもない事になってるらしいの」

父「えっ！なんじゃと、そりやえらい事じゃ！」

ドリーム《地震？津波？あいかわらず人間の世界は騒がしいのお》



東日本大震災の被災地には震災直後から、多くのボランティアが日本中から駆けつけます。

気仙沼同様、壊滅的な被害を受けた大島、そこがもう一つ大変だったのは交通の手段である船を津波により失くしてしまったことでした。

孤立する島、復興支援の手は思うように伸びてきません。

誰に頼ることもできない大島の人々、島民同士で助け合いながら必死で震災から数週間、生き延びるのです。

そのとき生まれたのが、気仙沼大島おバカ隊でした。



震災から数週間、日本中が「何かできんか」と思っているときでした。

広島江田島の江田島汽船に、江田島長より電話がありました。

市長と父は昔からの付き合いです。

市長「夢次郎さんも知ってのとおり、東日本が大変なことになっているじゃない。こないだNGOシビックフォースというところから電話があつてのお“気仙沼市の大島復旧のため船を用立ててくれねえか”というんじゃ。そこでお願いじゃが、こないだ廃船にした船があつたら。あれだしてもらえんか？」

父「ドリームのうみを出せいわれてものお。役に立つじゃろうか」

市長「大丈夫よ、ドリームはちゃんと働くよ。東日本のためじゃ、たのむ」



父「里香、わしゃドリームを江田島に送る事決めた。厳しい旅になると思うんじゃ。ドリームにもうひと踏ん張りしてもらおう頼もう思うんじゃ。」

里香「私も行く。私ももう大学生、東北の為に何かしたいと思ってたんだ。ちょうどいいわ、ドリームと一緒にいかせて」



ドリームじっちゃん、父、夢次郎と私をのせ江田島港を出港します。初めての外洋、沿岸添いとはいえドリームじっちゃんにとっては大変な航海となりました。

ドリーム;《おお？雨が降ってきた。風も強いぞ！うわああああ！荒波じゃ！いたいっいたいっ...いやっだめじゃ！弱音なんてはいとられん！もうちょっとじゃけんがんばらんと！わしはここで諦めるわけにはいかん。わしを待っている人達がおるんじゃけえ。江田島のみんなの想いを無駄になんかできん！》



広島から3日をかけ気仙沼に到着。

到着後は夜昼問わず、殆ど休みもとらず大島と気仙沼の間を行き来します。いずれの便も満杯です。

その上、海の上には多くのがれきが残り細心注意を払わねばなりません。

ガタガタ、グイ〜ン、どっどどど

ときおり悲鳴を上げるドリームじっちゃん。

そんな、ドリームじっちゃんを励まそうと里香は話しかけます。

里香;「みんなドリームじっちゃんに感謝してたよ! 私、広島ボランティア仲間に報告しようと大島の人々のビデオメッセージを集めたの、送る前に聴いてくれる」



そう言って里香は撮ったばかりのビデオカメラを向け再生ボタンを押すのです。
大島市民①;「君がドリームじいさんと一緒に来た子か。ドリームじいさんが来てから
というもの、少しずつだけどがれきも減って、復興に向かって町が片付いて助かっ
ります。広島の皆さんありがとう」



大島市民②;「ドリームじいさんが来てから、今まではちょっとしか届かなかった物資が大島にたくさん届くようになったよ。」

大島市民③;「ドリームじいさんが来るまでは小さい船が2隻しかなかった。段ボール一個一個積み下ろすのに精いっぱい、がれき撤去にまで手が回らんかったんよ。」



ボランティア;「僕たちはドリームじいさんがいなかったら、ボランティアとして大島に来ることさえ出来なかったよ。ドリームは人モノを運ぶただの船じゃない！ 生きる希望を運んでくれてるんだ。」

日に日に深まる江田島と大島の絆、しかし別れの時は確実に近づいていたのです。



ドリームが大島に来て1年、その日はやってきたのです。

タッタタタ

大島市民①「たいへんよお。たいへんよお。このチラシを見てえ！ドリームじいさんがとうとう広島に帰るんだって！」

大島市民②「ええっ！ほんまに？寂くなるよ。ドリームと一緒に頑張って復興を目指してきた仲間だ。ありがとうの気持ちで送り出すっぺ」

大島市民①「お別れセレモニーせんとな。」



船上での盛大なセレモニーも終わり、いよいよドリームのうみは最後の出航の時を迎えます。

パオーン(出向の音)

ドリーム;「時間か……。みんなありがとう。また会いましょう。ありがとう、ありがとう。みんなありがとう」

あふれ出る涙を止めることのできない里香、ふと見上げるとそこには多くの気仙沼の人の笑顔。

大島市民①「ドリーム～！またな～！本間にありがとう～！」

②「気をつけて帰れよー！」

③「バイバーイ！また会おう～！」

みんなあふれ出る涙をぬぐおうともせず、いつまでもいつまでも手を振るのでした。



ドリームが帰った後の大島では、夏に被災船の代替カーフェリーを就船しました。その新しい船の名前は「ドリームのうみ」に感謝と愛着をいつまでも記憶にとどめようとの意味から、その船に「ドリーム大島」としました。

一方、ドリームじっちゃんは今、江田島市民の広島市への交通手段として再び輝きを取り戻し、元気に瀬戸内海の海を多くの笑顔をつみ航海しています。ドリーム大島とドリームのうみ、この二隻の船が取り持つ大島と広島の絆、これから先も途切れることなく続く事でしょう。おしまい